

## 第 13 回高等学校改革プラン推進委員会（第三推進委員会）議事録

1 日時 平成 17 年 12 月 26 日（月）午後 1 時 30 分～午後 4 時 30 分

2 場所 伊那商工会館 1 階 大ホール

3 出席委員

池上 昭雄委員長	熊谷 秀男委員
笠原 伸二副委員長	川島 一慶委員
小坂 樫男委員	丸茂 貴子委員
小林 辰興委員	関 哲夫委員
小口 武男委員	北原 秀樹委員
北原 曜委員	藤本 功委員

4 開会

（野村主幹教育支援主事）

お時間になりましたので、始めさせていただきますと思います。委員長さんよろしくお願ひいたします。

（池上委員長）

皆さんこんにちは。大変お寒いところを遠路からお越しいただきまして、ありがとうございます。それでは 13 回目の会議を開催したいと思います。よろしくお願ひいたします。それでは次第の 2 でございますが、資料説明を事務局からお願ひいたします。

5 資料説明

（野村主幹教育支援主事）

資料説明の前に、他の推進委員会の様子も、いつものとおりお伝えしたいと思います。前回 12 月 4 日にありまして、その間他地区で重ねてありましたのでちょっと長くなるかもしれませんが、ご了承いただきたいと思います。

第 1 通学区でございます、12 月 10 日に、13 回が行われまして、中条高校の志願状況や地元中学の進路動向の現状を考え、年度内の設置は難しいという意見が大半を占め、統合もやむを得ないという意見、空洞化するという意見がありました。空洞化するとしても小規模化に有効な魅力づくりは可能なのかという疑問も出されました。

長野南高校と松代高校を統合し、松代高校の校舎、校地を活用するという、再編整備候補案に対し、該当地区の人口が減少しないという問題や、志願者数も多いということなどから、疑問が多く寄せられました。

14 回が 17 日に行われました。引き続き長野南高校と松代高校の統合について、少子化の状況から通学区全体を見渡した上で統合を前提とし、第 3 区から通学する生徒も多く、地域の重要さのことを考えると、長野南高校の校舎、校地を活用することも考えられるのではないかという意見も出されました。

昨日でございますが、12 月 25 日、多部制・単位制の廃止の問題を論議しましたが、引

き続き次回も論議されることとなりました。以上が第1通学区でございます。

続きまして第2通学区でございますが、12月11日に13回が行われました。望月高校を多部制・単位制に転換するという地域からの提案について、引き続き論議が行われました。地域の協力が得られるのが、メリットであるという意見もございましたが、コース制の利便性についての疑問の意見も出されました。多部制・単位制高校は、鉄道沿線への設置が望ましいという意見も多く出されました。引き続き検討を続けることになりました。

第6区の再編につきましては、望月高校と蓼科高校を、統合する案について改めて提案されましたが、多部制・単位制の廃止等に関連するため、引き続きの検討となりました。

14回は、23日に行われました。望月高校を多部制・単位制に転換する提案については、内容では評価できるものもあるが、交通の利便性の面から、望月での転換は難しいということになりました。多部制・単位制高校の配置について、野沢南高校を転換した場合や、他の転換する候補の学校が、あるかなど意見交換もいたしました。望月高校、蓼科高校を統合して魅力ある高校を、つくることについても肯定的な意見が多く出されていました。

統合対象校、多部制・単位制に転換する高校の審議の過程においては、校名を出しての議論が必要なため、不要な混乱を起こさないために、次回の会議は、一部非公開で行う事を合意いたしました。

第4通学区でございます、12月4日に13回が行われました。第12区の個別論議を行いまして、再編整備を行い、ここから魅力づくりをしていくと確認されました。統合の対象校については、次回引き続き審議することになりました。また単独校として維持できるかどうか、一番懸念されている白馬高校につきましては、今後の在り方やその魅力づくりについても、話し合いました。

18日に14回がありました。引き続き12区の個別論議が行われました。具体的な再編内容について審議しました。委員長提示の4つの具体的統合案について、そのメリット、デメリットを、検討するなど対応地区4校の今後の在り方について議論し、最終的に大町高校と大町北高校を、統合する案に賛成する意見が多数占め、両校の統合を最終報告に、盛り込むことに決定いたしました。11区の個別論議も行いまして、大系線沿線および新安曇野市の今後について、今後の専門高校の配置等も含め審議いたしました。

昨日でございますが15回目が行われました。大町高校と大町北高校の統合について再確認されました。大系線沿線および新安曇野市の高校について、再度審議いたしまして現状の配置の継続を承認いたしました。松本筑摩高校の多部制・単位制への移行に伴う全日制学級の取り扱いについて、審議がなされました。以上が他の推進委員会の様子でございます。

続きまして、諏訪地区高校改革プラン意見交換会についてご報告したいと思います。12月23日、午前8時30分から11時30分まで、予定を30分延長して行われましたが、岡谷市役所会議室において、岡谷南高校同窓会および東高校同窓会の共催で行われました。参加者200名ほどかと思われます。推進委員にもご案内がありまして、池上委員長、笠原副委員長、小口委員、丸茂委員、関委員、藤本委員が出席されました。県事務局から4名参加いたしました。最初に事務局から説明を、20分ほど行いその後意見交換がなされました。

6月に県教委再編成候補案が出たときに、諏訪地区は抜かされたと思った、対岸の火事かと思ったと、というような声とか、県教委の再編成候補案が出たときにどう思ったのかと、

一人ひとりの推進委員さんが、発言を求められました。再編整備については学級減で対応ができるのではないか、流出入の問題もあり、諏訪地区では生徒数が減らない、学校を減らす必要はない。結論を出すには時間をかけるように、魅力づくりをもっと論議して欲しい、候補案が決定案のように見える、白紙撤回をして欲しい、あるいは各校ごとに議論して欲しいというようなご意見が出されました。

事務局からお答えする部分もありましたが、池上委員長さんからは諏訪地区が再編整備の対象になった経過、それが9月に決定されるときに、報道にも十分出ていること、また白紙撤回はできないことなどをご説明いただきました。また笠原副委員長さんはじめ、推進委員さんにも説明をいただきました。最後にまとめとして公開質問状が提出されております。要請書と同じく委員さんにお配りしてございます。また後ほどお話ししたいと思います。

以下高校教育課野村主幹教育支援主事から資料説明 【説明内容省略】

## 6 議事

（池上委員長）

ありがとうございました。それではただいまの報告に対しまして、まず質問がございましたらお受けしたいと思います。よろしゅうございますか。

それでは進めて参ります。事務局から報告がありました中に、公開質問状がございしますが、その他学校の子どもから私のところに、質問状がまいっておりますが、適当な時期に適正なという形で、報告内容を委員長にお任せいただければありがたいと思うのですが、いかがでございましょうか。よろしゅうございますか。それではそんなことでお任せいただきたいと思います。

（藤本委員）

県教委がホームページで意見募集をしておりますね。その点について県教委に伺いたいのですが、要するにたたき台に対して、県民の皆さまからの意見募集ということなのでしょうか。どうも意図していることが、今一歩わからないのと、時期的になぜ今の時期か、本来的にたたき台が出た段階ではないのか。さらにわれわれ推進委員が各4通で議論している訳ですが、議論している内容との関連で、理解できないものですから、その辺のご説明をしていただけたらと思ひまして、発言しました。

（柳澤教育主幹）

ただいまの意見募集の件でございしますが、高校改革プランに関しましてはこれまでも昨年来さまざまな機会をとらえて、県民の皆さまからの意見募集あるいはパブリックコメント等をその都度やって参りましたが、通常日常的にもファックス、メール、電話等々でご意見ちょうだいしているわけでございます。

ちょうどまとめの時期に入参りますこと、実施計画策定にむけて、教育委員会として広く県民の皆さまから時期や期限を区切ってご意見を、お聞きしたいとこういふことでございまして、それを推進委員会のほうへお出しして、検討していただくかそういう趣旨ではございません。あくまでも教育委員会として、実施計画策定に向けて参考にしてい

たいと、こういうことでございますので、そんなふうにご理解いただきたいと思います。

（池上委員長）

よろしゅうございますか。

（藤本委員）

私の考えでは、ちょっと時期的に、もっと早めに出てしかるべきなのに、現時点でこの意見募集が出たことは、われわれの議論との兼ね合いのところで、今一步理解できなかったのですが。

（柳澤教育主幹）

それぞれの推進委員会におきましては、推進委員会ごとにそれぞれのご判断で県民の皆さまからの提言、意見を、お聞きする機会をとってきてございますので、今回のものは実施計画策定に向けて教育委員会として、参考にするために意見を募集したいという趣旨でございますので、ご理解をいただきたいと思います。

（池上委員長）

いずれにしても、議論が進行して、少し遅いという意識がございしますが、参考にするということでございますので、そういうふうに理解していただきたいと思います。ほかにございますか。

（小林委員）

新聞で見たかぎりですが、つい最近、今までは県教委では、その通学区全体がそろわないうと、その通学区の改革はしないと、そういうことをいわれましたが、この間は宮沢委員長さんは、その通学区の中で、出来るところからということを発言したら、その後また教育長がそれを否定したのか、そのところよくわからないのですが、実際はどうか確認を。

（池上委員長）

では、お願いします。

（柳澤教育主幹）

基本的には、推進委員会の第1回目の時にお示しました、私ども考えているスケジュールは変わっておりません。その中で、今のお話でございしますが、推進委員会によって、進捗が異なって仮にまとまらない、という事態になった場合には、その通学区全体のさまざまな改革、再編候補案にあがってくる学校以外も含めてで、ございますけれども、そういったところの配置が決まりませんので着手できないと、そうなりますと、その通学区全体が遅れてしまう。そういうことが懸念されるということで、当初のスケジュールどおり、それぞれの推進委員会から報告書をいただいて、スケジュールどおりに、進めていきたいと、こういうことでそれぞれの推進委員会からの報告をご期待申し上げたいとそういう趣

旨でございまして、基本的なところでのスケジュールが、変わったとかそういうことではございません。

（池上委員長）

よろしゅうございますか。はい。ほかにございますか。それでは次に進行させていただきます。

（藤本委員）

全部は読んでいる暇もなく、読んではいないのですが、葉養委員長さんのこのコメント、前回の新聞のコメントについても、県教委さんから若干のコメントはいただいたのですが、葉養委員長さんの２ページのところに、やはり実施計画は年次でつくって、実施していくべきことだろうという事です。委員長さん自身も新聞報道は一部であって若干誤解されるような、または一部が不本意に報道された点があったかもしれませんが、文教委員会の記事をさっと目を通しただけなのですけれども、やはり１９年度実施というのは基本的に無理だということが、お話から感じられるのです。もう一度再確認なのですが、今日新聞を急いで見ましたけれども、第１通学区でしたでしょうか、やはり委員長さん自身が、１９年度実施はもう無理だという発言をされているわけですけれども、われわれも、このところを強く求めたい訳ですけれども、再度この１９年度実施についてもう一言ご意見をいただきたいなと思うのですが。

（池上委員長）

はい。お願いいたします。

（柳澤教育主幹）

今の葉養委員長のお話でございしますが、今日お配りした文章を読んでいただければと思いますが、７ページあたりのところには、新聞記事は私の本意とはずれている、というような趣旨の発言がございします。すべて先送りということで委員長さんもお発言したわけではなくて、「それぞれの推進委員会がやってきている努力は、確保しなければならない。固まりつつあるものを先送りするというのは大変失礼である」というコメントもございします。

固まらなかったところをどうするのかと、ということが心配だというような趣旨の、ご発言だったと思います。また昨日のことでございしますが、第１通学区の委員長さんは、ある委員さんの発言を受けまして、それを受けてなかなか一斉スタートはと、というお話はあったのですが、私どもとしましては、先ほども申し上げましたとおり、当初お示したスケジュールで、それぞれの推進委員会から報告書もいただいていない段階でありますし、実施計画はその後ということになりますので、今時点でいつどうこうと、いう事を申し上げる段階ではないと思いますが。先ほど申しましたように、当初のスケジュールとおりでということで、考えているところでございします。

(池上委員長)

それでは今日のところは、前回の7区の再編につきまして、これから4名の方から、ご意見を拝聴することになっております。その後当然のことですが、7、8、9各地域のご提出をいただいた案につきまして、委員会でこちらで服膺(ふくよう)してまいりたいと思っております。

ただお聞きいただいてもおわかりでございますが、極めて困難な地区もございますので、皆さんのご意見を拝聴した後で、慎重に結論を出していきたいと、思っておりますので、よろしくお願いいたしますと思います。

それでは、事務局で調整していただいた順序で、ご発言をいただきたいと思います。後ほどクエスチョン・アンサーをさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

(野村主幹教育支援主事)

委員長、私のほうでかまわないですか。

それでは地域からのご意見を伺うということでありまして、資料にございますように1番の「岡谷東高等学校の存続と発展を図る実行委員会様」からご意見を伺いたいと思いますので、発表席のほうでお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

(岡谷東高等学校の存続と発展を図る実行委員会：大槻)

岡谷東高等学校同窓会長の大槻智恵子でございます。よろしくお願いいたします。先日は県教育委員会から、また池上委員長さま本当にお足元の悪いところ岡谷までおいでいただきまして、ありがとうございました。それでは時間の関係上ありませんので提案に移らせていただきます。

皆さまのお手元に資料が配布してあると思いますので、提案用紙に沿ってご説明いたしたいと思います。

初めに提案内容。旧第7通学区の高校統廃合案は白紙に戻し、旧第7通学区については当面統廃合することなく多様な規模、多様な特色を持った高校として整備していきます。

提案理由です。県教委が6月に出した、県立高校再編整備候補案は、諏訪市、岡谷市、茅野市周辺では、中学校卒業生数の減少率が低く、当面現状の高校数を維持していくことが適切であると、したことは十分根拠があります。

第3通学区で3校減とするたたき台は、1校平均40人×5.5学級を基本としての案ですが、県教委高校改革プラン検討委員会が行った県民アンケートでも3から4学級と、5から6学級が望ましいと回答する人が、多かったことを考えれば、多様な規模の高校が存在することが望ましく、旧第7通学区で1校減とする根拠はありません。

資料の1ページをご覧くださいと思います。ここに、3から4学級が39パーセント、5から6学級が38パーセントとありますが、このように一律5.5でなくいろいろな規模の学校が、あってもいいのではないかと思います。

次にいきます。旧第7通学区は、平成32年度の中学校卒業見込み者数でも、平成18年度卒業見込み者数とほぼ同数であり、18年度募集定数と同定数で、学級減、学校減の必要はありません。これは2ページをご覧ください。2ページの第7区を見ていただくと、募集学級数です。推定募集学級数が、平成18年が43学級でその間ずっと増えておりまして、

最後 32 年度もやはり 43 学級で、ほぼ同数であることがわかります。4 ページにそのグラフが載っておりますので、一目瞭然でわかると思います。

旧第 7 通学区は、平成 18 年度から平成 30 年度まで生徒増の見込みであり、平成 19 年度にその学校統廃合をすれば過大校が生まれ、教育の質の低下を招く恐れがあります。先ほどの 2 ページをご覧くださいと思いますが、やはり卒業生数を見ますと、平成 18 年は 1,897 名、その後 93、09、1,909 とかずっと上がっておりまして、平成 25 年、26 年には 2,045 名も卒業生があるということになります。最後 32 年には今と同じ、平成 18 年と同じ 1,893 名になりますので、それまではずっと増えたり減ったりはしていますが差はないのでこのままでよろしいのではないかと思います。この資料ですが、平成 31 年までは県の教育委員会の資料で、32 年は県民新聞からの資料でございます。このグラフも 3 ページに載っておりますが、良く見ていただければわかるのではないかと思います。

諏訪地区 9 校はそれぞれに歴史と伝統、魅力を持った高校であり、それぞれの特色を生かして、地域に貢献する人材を輩出しております。今後もそうした役割に対する地域の期待が、大きいと考えられます。地元 6 市町村の首長、教育委員会、高校 P T A 連合会、商工会議所、教職員団体、また各地区の市議会などでも、旧第 7 通学区での統廃合案の白紙撤回を求めていることを重く受け止める必要があります。6 ページから 8 ページと新聞報道がありますので、ご覧になっていただければよろしいと思います。

第三通学区推進委員会に、旧第 7 通学区の高校統廃合の具体案が、提案されたのは 11 月 23 日のことであり、1 月までに地元の理解を得ることは困難であり、地域の合意が得られる提案は上記のみです。最初に申し上げたとおりです。教育は国家百年の大計であり、拙速な論議と結論づけは避けなくてはならないです。

先ほども申し上げましたが、以上が内容でございます。旧第 7 通学区は 11 月 23 日に突然学校名が上がりました。ある市長が「爆弾を落とされた感じだ」と表現しております。私たちも同じ思いです。それからまだわずか 1 カ月です。

先日 23 日に県教育委員の方、池上委員長様、また地元推進委員 6 名のうち 5 名の方々に、おいでいただきましてやっと準備委員との話し合いが、初めて持たれました。白熱した議論の末、審議その対応で地域住民の総意として、旧第 7 通学区の高校統廃合案は白紙撤回を要求していくことが確認されました。もう岡谷だけの問題ではなく、本当に諏訪地区が一体となって反対しております。住民の声をぜひ尊重していただきたく、今後の推進委員会での推奨を諮っていただくことを強くお願いし、白紙撤回を強く要望いたします。

また先ほどのお話にありました、ホームページの提案のことでございますが、ホームページといいますと、限られた人しか見ないと思います。それで用紙も決められておりますね。どんな用紙でもいいとなりますと、本当に皆さん個人的にも出したいとお思いの方、大勢いると思いますが、こういう枠にはめられてしまいますと、なかなか出す機会が少ないのではないかと思います。全員の方がホームページを開くとは限りませんし、パソコン持っているとも限りません。ぜひそれも考えていただきたいと思います。

以上で第 7 通学区の、岡谷東高等学校の提案を申し上げましたが、よろしくお願いします。

(池上委員長)

ご苦労さまでした。

それではこれから質疑応答をいたしたいと思います。今のご発言につきまして、委員のほうからご質問、ご意見を拝聴したいと思いますが、いかがでございましょうか。

(北原曜委員)

非常に丁寧なご提案で、大変痛み入ります。

確かにいろいろ問題点もあろうかと思うのですが、7区の中学校卒業生数の推移を見ますと、平成2年が飛び抜けてピークで一番多かったときですが、その時と比べますと、現在平成17年で56.5パーセントになっているのですね。これは全部で12区、旧通学区がありますが、その中で最も低い割合なのですね。ほかの8、9を比べてみますと7区の減り方というのが、工業が中心ということもあろうかと思いますが、平成2年から現在まで「ガクッ」と減って、そのあとずっと同じようなレベルで、推移しているわけです。

それでほかの8区や9区を見比べてみますと、その辺農業が盛んだということもあろうかと思うのですが、徐々に減るという形なのですね。この7、8、9を全体的に見てみますと、多少でこぼこはありますが、やはり一様に減ってきていることは確かなのですね。要は減り方が違っていたということで、基準の年をいつにするかで大きく変わってしまうわけです。

やはり高校をつくってきたいきさつ、学級数を増やすなり高校を新設するなりしてきた、平成2年までのいきさつ、中学卒業生数が増えるに併せて、増加してきたいきさつからすれば、今ずっと減っていますから減ってきた減り方ではなく、総数としていかに減ったかで考えていかなくはいけないと思うのです。17年と比較してそれ程変わらないのではないかと、いうのはちょっと腑に落ちないところですが、いかがお考えでしょうか。

(岡谷東高等学校の存続と発展を図る実行委員会：大槻)

平成12年までさかのぼっていただいたものですから、ちょっと困りますが、そのあともやはり学校によっては、学級数など減ったりしていますよね。ですから今現在でもうこのまま43学級で、卒業生数もこれだけの人数ですので、平成2年から比べれば、確かに減ってきていますが、ずっとそこでやってこられたということではないでしょうか。

(北原曜委員)

その減り方に、いろいろなパターンがあるということで、減った割合で考えてみれば、私ちょっと32年までの資料がないのですが、31年には7区で54パーセント、8区で60.1パーセント、9区で54.7パーセントという減少率ですね。こういう事から考えて見ますと、やはり減少割合は全体的ではありますが、やはり第7区もかなり激しく減っているということだと思うのです。

(池上委員長)

いかがですか、ご意見ございますか。今のお話。



(岡谷東高等学校の存続と発展を図る実行委員会：大槻)

私も平成2年の頃のことは理解できないのですが、今現状に18年で維持できるなら、そのまま今のままの学校で、維持できるのではないかなと私は考えます。

(池上委員長)

わかりました。今の議論はこのくらいにしておきましょう。ほかにご意見ございますか。

(小林委員)

大槻さんの熱心な貴重なご意見、本当にご苦労さまでございました。質問といいますが、意見でもよろしいですか。

ここに出ています、「 」の2番目と7番目、8番目は私も同感のところがあります。ただ、7番目については、先ほど県教委から話がありましたので、ぎりぎり少しでもどこが、リミットかわかりませんが、少しでも時間をかけて見直ししていくしかないかなと今思っています。

ちょっとほかのことについて、私の意見というか理解をしていただきたいのです。確かに、あとの方も皆そうだと思うのですが、生徒数の動きだとかそういうことを基にして、諏訪を減らす必要はないと、いうご意見がたぶんずっと続いていくと思うのですが、この推進委員会は、当初いろいろな意見があったわけですが、非常に長い目で見たときにどうしても統廃合が、避けられないという大前提が、まずあるわけであります。そうした時に、ただ減らすということだけで考えていいのかどうか。それを私らは一番問題にしたことであって、生徒数が減少しているとか、これがひとつは大事な材料ではありますが、それがすべてではありません。

何を問題にしたかという、本当に魅力ある学校づくりをしなければいけない。これを私らはさんざん議論してきたわけであります。従って、その生徒数とかそういう数字的なことでいえば、この3通も地域高校などは、まさにすぐ対象になるわけであります。しかしわれわれは、地域高校をもしなくすとすると、その地域に住んでいる人々の通学権さえ、奪ってしまうという観点で、一応今回地域高校は、そういうことになっても維持していこうと、いわゆる生徒数だけで考えるのではないわけです。

それで魅力ある学校づくりという観点で考えたときに、どうしてもわれわれが問題にしたのは、職業高校はいろいろ考えられていますが、充実していけば本当に今必要であると、いう事が多くの意見であって、それが下伊那にもあのように反映したわけです。しかし普通科高校については、非常に問題があるということです。魅力ある学校づくりということで全部あたってののですが、もう誰でも大学へ行かれる時代になった中で、普通科高校を本当に再編しなくてはならないということです。その中で単独の普通科高校を見ますと、地域高校を除くと、専門学科は含めたとして、上伊那は2校、下伊那2校であるのですが、諏訪は6校もあるのです。ぜひこの単独の普通科高校については、本当に再編しなければ魅力ある学校づくりはできないのではないかな。こういう議論がかなりあったのであります。

確かに諏訪という、については、もう今後第3通だけでなく、ほかの通学区からも移動がものすごくあるわけであります。正直に申しますと私の住んでいる辰野は、諏訪に一番近いのですが、かつては6割以上が諏訪へ、生徒が進学していました。現在は3割強に

変わってきております。

従ってただ諏訪だけが、「人数がこうだから」ではなくて、諏訪の本当に魅力ある学校づくりということを考えていって欲しいなと思います。ぜひ生徒数だけで、減らす必要ないかどうかという議論でなく、もう少し幅広く考えていただければと思います。

（池上委員長）

ありがとうございました。

いかがでございますか。今の話は、今後の魅力づくりのところに反映させるような形で、吸収していきたいと思います。ほかの皆さんいかがでしょうか。はい、それでは先ほど、大槻さんからホームページの問題ありましたですね。これをちょっと答えてもらいましょう。

（柳澤教育主幹）

今回の県の高校改革プランに関する意見募集の件かと、と思いますが、先だっの新聞の「広報ながの」の中でも意見募集ということで出させていただきました。その中にも用紙等については「お電話いただければお送りいたします」ということになっていますし、これまでもいろいろな形でパブリックコメント、意見募集というのは、やってきております。

例えば昨年の例ですと、各小・中・高通じて家庭に届くようなチラシをつくったりとか、その都度その都度いろいろなパターンで、収集をはかるというようなことをやっておりますが、今回そういうことで、新聞に載せていただいた「広報ながの」と、今回ホームページをやらせていただいた点でご理解いただければと思います。

（池上委員長）

よろしゅうございますか、今のホームページの件は。

（岡谷東高等学校の存続と発展を図る実行委員会：大槻）

新聞に載ってましたよね。それも用紙を、ホームページから出すように書いてありますよね。違いますか。

（柳澤教育主幹）

ホームページと電話でも、受け付けておりますので、ご連絡いただければお送りしますということになっております。そんな点でご理解いただければと思いますが。

（岡谷東高等学校の存続と発展を図る実行委員会：大槻）

はい、わかりました。ありがとうございました。

（池上委員長）

大槻さん、ほかにございますか。よろしゅうございますか。こういう席にお越しいただいてご発表いただくわけですから、まずはご苦労さんでございました。ありがとうございました。

特に諏訪の地区につきましては、慎重なということでいろいろまだ審議の途中、委員というより皆さんを、中心にしたところでまだ検討の途中と、いうことを私も十分承知しておりますので、今後このところを慎重に審議していただきたいと、こう思いますのでよろしく願いいたします。

あといろいろ議論の方法についてまた、ご提案いただければありがたいなと、認識しておりますのでよろしく願いします。本日はご苦労さまでした。ありがとうございました。

（野村主幹教育支援主事）

それでは続きまして2番に、移らせていただきますが、岡谷南高等学校高校改革問題改革研究委員会、同校同窓会、同校PTAということでお願いいたします。なお、推進委員さんの皆さまにおかれましては質問を中心ということでありまして、審議はまた別の機会にお願いできればと思いますのでよろしく願いいたします。

（岡谷南高等学校高校改革問題改革研究委員会：高野）

本日はこのような貴重な機会を、与えていただきまして誠にありがとうございます。また先日23日には池上委員長さん、推進委員諏訪地区のかた、あるいは県教委の皆さん、本当に足元の悪い中おいでいただきまして、われわれの事を聞いていただきましてありがとうございました。われわれの意見といいますが、皆さんに聞いていただけるということで、喜んでまいりましたので、ぜひお願いします。よろしくお願いします。

お手元の、地域からのご意見というところの、11ページにあたります。多少数字も出てくるものですから、私原稿を見ながらやらせていただきますが、お許してください。お願いします。

今までいろいろ数字的なことが出てきておりますが、一番困るのが生徒なのですね。ですから数字的なところも、今のご意見、推進委員のかたのご発言伺っておりまして、重複といいますが、あるいはかち合うところがあるかと、と思いますがお許しいただきたいと思えます。

それでは流入に関する問題ということで、1番からご説明させていただきます。まずお手持ちの、今日部数150ほどお持ちしたのですが、印刷が間に合わなかったものですから、今日お持ちして申し訳ありませんでしたが、1番の流入に関する問題と、いうところから照らし合わせながらご覧いただければと思います。

まず別紙といいますがこちらの(1)流入に関する問題をご覧いただきまして、この中申し訳ありません、ちょっとソフト的なことで、平成のへいの字、用紙の片面線の枠の中の左側、平成の平の字、上一本抜けております。申し訳ありませんが一本引いておいていただいて、平成14年と平成17年ということでお願いいたします。

ご覧いただきましてどういうことかといえますと、旧第11通学区、それから第9、第7区、それから8区のその比較したものということでご覧いただきたいと思うのですが、8区から7区へ通学する生徒が、平成16年には119名、平成17年には119名、同じですね。それから流出、これはあくまでも第7通学区を、主体に考えて流出流入と申し上げているのですが、平成16年には20名、平成17年には15名、同様に11区からの第7区への流入

ということで、平成 16 年には 133 名、17 年には 134 名。流出に関しましては平成 16 年に 27 名、平成 17 年に 36 名。このような状況になっております。

岡谷という立地的にも、交通の便そういうことは、まさしく地域の受け皿になっているのではないかと、こういうことになると受け取っていただけたと思います。

なお南高なのですが、こちらには現在 8 区から 55 名の方、11 区から 71 名の学生、生徒さんがおります。このように非常に交流が各地域で、バランスが非常に良いことなのではないかと思います。それから 7 区から県外への進学者数が今 78 名いるのです。私立高校の通信制への進学者が 20 名、県内の 7 区以外の私立高校への進学者数が 64 名。それぞれの生徒が自分の希望で進路を選択しているわけです。

選択理由のひとつにはより良い、よりピッタリ進路をとる学校へ、高校へ、それと 7 区内の公立高校へ進学できないので、それで県外へいっちゃると、いう生徒さんがいるかと思われま。前者といたしますか、要するにより高い進学率を誇る、高校へという気持ちでいる方が、7 区から流出されるというのは、非常に課題で、ずっといわれていた課題です。それから後者、7 区の公立高校へ進学出来ずにと、いうこれが原因ということは 7 区に定員を満たさない、そういう高校が出来てしまっていると、いうことの二因であるかと思ひます。

ですからこれらの生徒さんの流出、「生徒さん」という、さん付けもなんですので、生徒が流出の対象というのは、早急に急がせなければならぬのはわかりますが、これを解決するということのために、岡谷南高等学校と岡谷東高等学校が統合するというのは、とうてい理解できないのです。と同時にこれを考えたときに、もし流出を問題とするならば、旧第 7 通学区の公立高校に、進学できずに県外へ進学して行く生徒の、受け皿をどうするのかと。この辺のところを課題ということで、ぜひもう少し詰めていただきたいと思います。

それから骨子というか、この要項の 2 番目に移りますが、中学を卒業した数に対する疑問ということで、幾つか確認させていただきます。平成 2 年のピーク時と比較して、平成 31 年の減少率を、検討しているなら、なぜ。これは皆さんなぜ今さらと、お考えかと思いますが、ピークの時を基準にしなければいけないと、いうのがわれわれ思ったことなのです。

生徒数の減少傾向が、今安定しているクラス数を、調整した平成 18 年を基準にするということで、これも皆さん当然の事ながらお手元の資料、別紙の(2)の ですね。「中学卒業生数の比較」ということで、18 年を 100 としたときに 31 年、32 年とはという表になっているのです。上段が人数、下段、少し網掛けがあるほうが、対平成 18 年度の比較ということになります。これ見ていただくとおわかりかと思ひます。

要するに、ここからですね、前からおっしゃっていますが、それは都合のいい年を基準にすればこうなるよと、ということなのですが、ただちょっと伺いたいののですが、県教委さんの高校が増えたということも、それなりの理由があって皆さんいらしたのでですね。

ですから、今度は例えば皆さんが、予算を組まれるようなときどうでしょう。平成 2 年ですから、一回りですね、一回り以上、予算を立てるときに、そんな昔の数字を使いますかね、要するに「今現在こう」なのだから、「今年はこうで来年はこうで」と、進んでいくのが普通予算。私は素人ですから、申し上げていいのかわかりませんが、年度というのは、

同年度の数値を基に予算化するというのが、普通考えられることだと思います。ですからこんなこといろいろいっていても始まらないと、いうのはわかりますが、ただ私どもとしてはこういう気持ちで、おりますということをご理解いただきたい。

それからこのとおり、平成 31 年で 7 区と 8 区の生徒数の差、これを見ていただきますと 102 名です。それから 32 年では、差というのが実に 221 名。これはもう高校 1 学級分ですよ、40 人として 5 クラス分減っております。減っているというか差が出てしまっているわけですね。

こんなようなことで ですが、前回の推進委員会のときに配布していただいた資料を、お借りしたもののなのですが 平成 18 年推定ということで、後期選抜のみに限定させてはおりますが、中学卒業者数と志願予定者数の比較ということで、私どもへちょうだいした資料なのですが、こういったものを見ていただきますと、旧 7 通学区というのは中学卒業者数 1,897 人、これに対しまして志願者予定数が 1,687 人ということで、その差 210 人。これでいいとは思われませんか、どうでしょう。

別紙というか私は見ておりまして、ただし旧 7 通学区の生徒数の減少といえますのは、平成 18 年今度も 3 クラス減、実はうちの南高も 1 クラス減っております。ですからそんなようなことで、吸収できる範囲のことだと、考えております。いろいろ流入ありますので、この表から見ても、現状維持がわれわれとしては妥当なのだけど、何で減るのかなというのが、率直な疑問なのです。

それからこの次の(3)、大きい提言、提言にあたるかどうかかわからないのですが、大きい 3 番目に移らせていただきます。県教委では、クラス数が 5.5 学級を想定して、公立が 76 校、これを目安にしているということで、その中で地域校は対象外ということで、先ほど来おっしゃっていただいておりますし、当然こういうことだと思いますので、この中に平均値をなくすというのに 4 校のクラス数を入れてなにとこう考えます。ですから地域校 4 校除きますと現在でもクラス数は、5.2 になります。それにしても 5 から 6 の間に入っているということで、こんな点からも本当に統合が、必要なのかと考えるところです。

7 区におきましては、現在のクラス数というのが、9 校平均で 5.1 学級です。それから岡谷南におきましては現在 6 学級。今後の生徒数の推移をいろいろ考えたとしても、5 学級は確保できると、当然確保しなければいけない。われわれ統合の対象とされるのはどうしてだろうと、見当がつかないということになってしまいました。

また旧第 7 通学区、通学区、通学区と大変申し訳ありませんが、第 7 通学区の普通科割合が、異常に高いというご指摘も、あるということですが、県平均が 71.4 パーセントです。これが 73.9 パーセントと、いうこの数字なのですが、これは町村部少ないところを単純に、合算して計算した数字でありまして、他の通学区、旧 9 通学区などの町区の普通科割合というのが 7 区より高くなっていることがあります。ですからほかと比較してどうのこうのというのではなく、自分のところの第 7 通学区は、果たして減らしていいのかとこんなふうに考えています。

要するに数字合わせと、いうと皆さんいやな顔されますが、岡谷、諏訪というのは交通の利便性、いいところなのですが、どうもいろいろ状況をみますと、交通の利便性の悪いところに多部制、単位制高校、あるいは総合学科、定時制高校とこういったものが、設置するという傾向がみられるのではないかと。これでは学級数の少ない高校を、集めたのでは

ないかと思っております。子どもたちは、いろいろな多様化した要望を持っています。ですからもしこのまま、いろいろなっていきますと、それに伴って通学区域の拡大というのは苦勞するためではないかとそう考えます。

それから4番目、魅力ある高校づくりなのですが、ある第3通学区の推進委員のかたのご意見の中に、高校改革の問題点の中の一節ということで、単に地域の複数の高校の退学者が多いのは、希望していない入学が多い。要するに本人が希望していないのに、その学校に入る。こういうことが多いと述べられていたのですが、本当に残念なことだと思います。どんな高校をつくるにしても、ここに魅力を感じて実際に、通学して来るというのが子どもたちなのですよ。ですから魅力ある高校づくりということで県教委の方、推進委員の方が案を、出されておりますが、実際にこの前あったのですが、子どもたちが何に魅力を感じているのか、どういう理由で学校を選んでいるのか、これもある高校、ある高校と、さっきからはぐらかしているのですが、高校のアンケートを見せていただいたのですが、今の中学生が魅力ある、要するにこれから高校に入る生徒さん、これが魅力ある高校でなければ、当然行きたくないですよ。中学生のお子さんに、魅力ある高校ってどんなのと、アンケートがありまして、まず進学率が高い、自分の学力にあっている、あるいは通学距離が近い、クラブ活動・生徒会活動が盛んである、校風が良い、30人学級等があげられていました。

岡谷南におきましても入学希望者をみても、倍率も高く、さらに退学者が平成16年、17年で各1名おりますが、いろいろ諸事情あってと聞いております。そのような自由な校風というのが、いいのではないかと、みんな子どもたちそれぞれに、それぞれの高校生活を送っております。

それから進学状況を見ましても、進学が79.2パーセント、留学が1.4パーセント、アメリカを含めると、進学率も高いです。それから朝読書をしたり、放課後あるいは夏休みなどの補習授業、子どもたち見ていますと、こつこつこつこつと本当にやっています。私たちのころは遊ぶことばかりだったのですけれどね。このような学習環境づくり、常にそういったところにおかれているわけです。

いろいろな資料の方に後ろ新聞がついております。こちらのほうもご覧いただきまして、子どもたちいかにのびのびと高校生活、自分のことをやっているのか。一人ひとりの進路希望の実現のために、先生方も熱心にやっていたいでいます。進路指導、生活指導、こういうのを的確にやっております。ですから子どもたちもそのことで、われわれ父兄も安心しておまかせできる。こういう南高の現状です。

クラブ活動なども、うんと盛んにやられているなというので、後ろの方良く見て下さい。新聞の資料を付けてあります。演劇部、生徒会活動なんかも校内、地域社会への交流などもはかっています。地元での奉仕活動も積極的に参加し、その結果地域にも愛され、生徒自身も一人ひとり輝いている、これが南高のいいところ、これが誇りでもあります。子どもたちのアンケートにも、ありましたけどように進学率の高い高校、30人学級を目指すことが、魅力ある高校づくりになるのかなと思います。要するにいかに先生方と密接に接するかと、自分たちのやりたいことができるかと。現在岡谷南には英語学科というのがありますが、そのほかに理数科というのいいのではないかと考えています。

それから最後5番目になりますが、地理的条件ですね。第3通学区これは他の通学区と

比較して、広いという事があります。交通の利便性が悪いということも、否めないことだと思います。上伊那、下伊那、交通機関というのは飯田線一本ということでもあります。通学にも不便を感じていると思います。岡谷というのは中央線と飯田線の分岐点になっておりまして、こういった面ではぜんぜん不便は感じないと、それから駅から 20 分ぐらいと、比較的近いところにあります。ですから別に車を使わなくても、徒歩で通えるという魅力があります。町の中にあるようなイメージですが、諏訪湖畔という静かな学習環境も、確保されておりまして、立地条件や地勢を考えましても非常に恵まれたところにあります。

こういったことからいいましても、あるいは保護者の経済的負担を、考慮にいれましても、もう一度ご検討いただきたいというのがわれわれの思いです。それと 1 点県教委の皆さんにお伺いしたいのですが、改革プランがまとまらない地区というのが、校舎改築とか修繕もしていただけないという、ニュアンスの発言があったと、聞いておりますが、この点はどのようなのでしょうか。要するにこれからよくしようと考え方に対するプレッシャー。もしそういうニュアンスの発言があるとすれば、プレッシャー以外の何ものでもないと思います。

それから私伊那の生徒さんに、あやまらなければならないことがあります。それは先日松本で県議会議員のかたと高校生との、意見交換会がありまして、私そこに出させていただきました。そこで伊那北の生徒さん、最初常に大人に対立する理論でやっているのだと、私思い込んでいたんです。ところがそこで伊那北の生徒さん、ほかの生徒さん、県議会議員の方が、タジタジとするほど自分の意見を、ばんばんぶつつけていました。

ですからこういうのを見ますと、やはり最初に伊那のほうから来たという偏見があったので、本当に伊那の生徒さん、皆さんに申し訳なかったなということで、ここでおわびをさせていただきます。申し訳ありませんでした。私その時すごく刺激を受けてまいりまして、なんとか高校をもっと素晴らしいものにするには、どうしたらいいのか…。

(野村主幹教育支援主事)

すみません。そろそろまとめてもらえますか。もう時刻も…。

(岡谷南高等学校高校改革問題改革研究委員会：高野)

はい。申し訳ありません。ではまとめさせていただきますけど、第 3 通学区の推進委員の皆さん、3 校減らすのが目的ではなくて、ぜひ魅力ある高校を、つくるにはどうしたらいいのかということを、話し合う場にさせていただくことを、ぜひよろしくお願いいたします。すみません、長くなって申し訳ありませんでした。

(池上委員長)

丁寧なご説明ありがとうございました。

ひとつ質問がございましたが、その前に委員から質問を、中心にしてご発言いただければありがたいと思います。よろしくどうぞお願いいたします。

(小林委員)

本当にご苦労さまでございました。ひとつだけお聞きしたいのですが、先ほど地域内の生徒数の、カウントされましたが、160人中ちょっとの数でしたよね、先ほど合計しますと、それで私たちもこのことを非常に、問題にしていたけれども、こういう状況になっているのですけれども、諏訪の高校は本当に一生懸命、魅力ある学校づくりに努力しているのですよね。それにもかかわらずこういう状況が出てきている。ということで現状の中だけで、いわゆるそれぞれの学校独自だけの改革だけで、いいのかどうかちょっとお聞きしたい。

(岡谷南高等学校高校改革問題改革研究委員会：高野)

よろしいですか。はっきり申し上げて、われわれ今までいきなりすぎて、「目覚まし時計」どころではないですね、頭の上で「ガンガンガン」とやっていたのが、要するに11月23日でした。でこれからわれわれが、どんなことができるのか。

先般の会議で皆さん、推進委員の皆さん、来ていただいたのですが、1カ月目に急にこう試案が出てきたときに、どうですかと伺ったのは実は私なのです。ちょうどその時の状況が私どもというふうに、お考えいただけないでしょうか。これからどんなふうにしたらいいのか、今考えあぐねているところです。これが私の答えなのですが、よろしいでしょうか。

(池上委員長)

ありがとうございます。ほかにございますか。それでは先ほどの、プランがまとまらないと、いうくだりのご説明をいただきたいと思います。

(柳澤教育主幹)

おそらく、12月の教育委員会定例会、あるいは県会でのことの発言を、めぐってのことと思いますが、最初にも申し上げましたとおり、仮定の問題としてのお話かと思いますが、万が一そのプランがまとまらないう事態になりますと、その通学区全体の、さまざまな再編あるいはいろんな魅力づくり等々の、施設設備等の問題を含めて取り組むことが、できなくなってしまう。

従ってそういうことが懸念されるので、できるだけスケジュールどおりに、報告をいただきたいと、またそういうように、それぞれの推進委員会が、精力的な検討を進めていただいていることから、1月初旬、中旬には報告がいただけるものと期待をしていると、こういう仮定でのお話で、基本的なところは、今お話申し上げたとおりでございます。

(岡谷南高等学校高校改革問題改革研究委員会：高野)

すみません、今の事なのですが、要するに第3通学区全体として、お考えなのでしょうか。ちょっとその辺を、よろしくお願いいたします。



(柳澤教育主幹)

あくまでも「仮定の上」でございますので、それぞれの推進委員会が1月初旬、中旬、こちらのほうは1月下旬ぐらいまでというお話が前にもございましたが、いただけるものと、私どもは考えておりますので、それをいただければ、それに沿って実施計画を、策定してまいりたいと考えております。

今仮定の上でのお話でありますけれども、「通学区」といいましたのは、通学区全体でございます。通学区全体の中で再編整備、そしてどういう魅力づけをするかということが決まりませんと、部分的にやっていくということは、葉養検討委員会委員長の言葉でいうと、「それぞれエゴが働いてごね得」、みたいな発言もございましたけれども、通学区全体がまとまりませんと、その動きができないということは確かでございます。

(岡谷南高等学校高校改革問題改革研究委員会：高野)

申し訳ありません。ちょっとよろしいですか。

ただ第3通学区全体の問題として、ただ私、引っ掛かったことがあるんですが、「ごね得」というのは、どういうことでしょうか。ちょっと伺いたいと思います。よろしく願いいたします。

(池上委員長)

それは言葉のあやでしょう。おわかりでございましょう。

(柳澤教育主幹)

すみません。葉養委員長さんが今回の文教委員会の、参考人としてお出でになったときに、そういった表現がございましたと、いうことでありまして、決して私どもがそうしているわけではありませんが、ある部分だけが手がついて、ある部分だけ手につかないということになりますと、全体のバランスがとれませんので、例えばいろいろな改修するにしても、大変な出費もございますので、そういったところが全体の配置がまとまりませんと、なかなか手がつかないと、そういうことでございます。

(池上委員長)

よろしゅうございますか。はい。ほかにございますかね。それでは、丁寧なご発言いただきまして、ありがとうございました。大変お疲れさまでございました。

委員会といたしましても、より良い学校ということで、これから魅力づくりということなのですね。実はこの委員会が始まった当時から、議論がおきておりまして、これからこれを集大成するということだと思います。

ただご賢察のごとく平成の初期から比べますと、大幅に子どもたちが減っているということは、事実でございますので、このあたりはいろいろな側面から、客観的に考えて、やはり対応しなければいけない。また地域の、その他の地域の状況もお考えいただいて、われわれのところはと、いうところを3通はと、お考えいただいて、ご協力を賜りたいという意味で、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。では次をお願いします。

(野村主幹教育支援主事)

ありがとうございました。それでは3番目ですが、南高保護者の会さま、お願いいたします。

(南高保護者の会：北原)

本日は当会にお招きいただき、ありがとうございました。私は南高(なんこう)と読みますが、南高保護者の会会長、北原守です。よろしくお願いいたします。

南高保護者の会は、岡谷南高等学校在校生と岡谷南高等学校のための会であります。以下の文から、岡谷南高等学校のことを南高と呼ばせていただきます。

先日、生徒会役員と保護者の懇談会がありました。終了後、生徒会長宮坂卓也君から突然呼び止められました。「何とかして生徒会の気持ちを推進委員の皆さんに伝えたい。それができる日は26日(月曜日)で、僕たちには授業がある。どうしたらよいか」と相談されました。彼の顔は真っ赤になり今にも泣きそうな、しかし力強い目をしていました。しばらく沈黙は続き、彼に言いました。「私たちの会が君たちの代わりに伝える」。私がそう答えると彼は一言だけ礼を言い、深々とおじぎをし、足早に生徒会室に向かいました。

南高生のおかげで、私は目が覚めました。純粋に母校を守ろうとする姿、母校を誇りに思うが故、もがき苦しき大きな物事に立ち向かう勇氣、母校存続を訴える南高生の叫びは私の心を揺さぶり、かつて私にも情熱や反骨精神が、あったことを思い出させてくれました。南高卒業生の私は後輩のことを誇りに思います。ここに彼らは来ることができませんでしたが、彼らに礼を言わせていただきます。「ありがとう南高生諸君」。

それでは長野県立岡谷南高等学校生徒会の、まとめた要望書を代読させていただきます。資料の中に、1カ所訂正して欲しいと、生徒会長から連絡がありましたので、資料の訂正をお願いします。地域からのご意見の13ページ。下から10行目、諏訪地区の中学卒業生数は平成27年となっておりますが、それを30年に、書き換えてください。お願いします。

それでは読ませていただきます。

『高等学校改革プラン第三推進委員会での統廃合が示された、11月23日は僕たちは修学旅行の真っ最中であった。南高校と東高校とが統廃合の対象と知ったのは、羽田から自宅に向かう東京都内のバスの中で、先生から知らされたとき、バスの中から声が消えてしまった。みんなどのような気持ちで受け止めたのか、楽しい高校生活の思い出が消えてしまった思いがした。

長野県教育委員会が示した案には、生徒数の減少が少ない、諏訪地方の高校が統廃合の対象ではなかったはずなのに、「いつ、どこで、誰が」このようなことを決めてしまったのか、生徒をはじめ親も先生も地域の人、誰も知らされていない。推進委員会の試案には愕然とした。現在の南高校は先輩たちが残してくれた伝統を守りながら、その伝統を絶やさないためにも部活動に力を入れ、他校には負けない実力をつけている。

スポーツ面では弓道で全国ベスト16、スケートの世界ジュニア大会出場や長野県総合優勝、ボート部の毎年インターハイ出場などがあり、先輩たちの中には、オリンピックに出場した選手もいる。また、本校の伝統行事でもある競歩大会は、県下最長であり精神の鍛錬や仲間意識の高揚をはかっている。さらに文化活動においても、演劇部の関東大会出場や、英語のスピーチコンテストでは、南高生が上位独占といった成果をあげ、特色ある校

風を築いてきました。

それなのになぜ唐突な統廃合問題が、沸き上がってきたのか。諏訪地区の中学校卒業生数は、平成 30 年度までは横ばいしないし、増加するという状態であることは、周知のことと思いますが、その状況で学校を減らすということは、現在の小、中学生がかなり厳しい受験戦争を強いられ、足切り状態は必至となり、中学生の夢をも奪いかねない事態となることが予想されます。

県教育委員会の原案では、諏訪 0、上伊那 2、下伊那 1 校減らすということであったか。数合わせのために、旧第 7、8、9 通学区から各 1 校の削減をする、という大人の考えとは思えない案を出している。以上のことから、南高、東高の存在価値は十分あり、必要であると考えられるので、案の白紙撤回を、提案申し上げます。万が一諏訪地方の高校が、統廃合される場合にあって、今後の生徒数の推移や、地域の人たちの意見を十分取り入れ、高等学校改革プラン推進委員会の最も基本事項である、魅力ある高校づくりに関する事項に、重点を置き協議していただきたく提案申し上げます。

長野県立岡谷南高等学校生徒会長：宮坂卓也』

ご拝聴ありがとうございました。

（池上委員長）

ご苦労さまでございました。ありがとうございました。これは質問はございません。当人ではございませんから、恐縮でございます。ご苦労さまでございました。ありがとうございました。

ちょっと中途になりますが、ここで 15 分間休憩を致したいと思います。

【休憩後再開】

（池上委員長）

では、事務局、後ろがつかえていますからいきましょう。

（野村主幹教育支援主事）

はい。それでは、時間もないところでありますので、地域からのご意見ということで、長野県高等学校教職員組合諏訪支部様お願いします。

およそ 15 分でお願いしていますが、よろしいでしょうか。お願いいたします。

（長野県高等学校教職員組合諏訪支部：中村）

どうも、よろしくお願いします。諏訪支部の支部長をやっています中村といいます。

私たち教職員一同は、高校改革プランについては、17 分、18 分持たせていただいて同総会の方々と地域の方々と一緒にできるだけの協力は、させていただいております。

今日は、提案ということで話させていただきます。基本的な考え方については、そこに書いてあるとおりですが、とにかく、第 7 区については、議論が始まったばかりですので、県からの説明、地域の声を十分聞いていただいて、時間をかけた提案というのを、出していただきたいと思います。

高校改革についての重要な点というのは、やはり教育条件の充実、整備、魅力ある学校というのがあると思うのですが、子どもたちにとって、何がプラスになるのかというその視点ですね、そこを十分見極める必要があるのではないかと思います。

生徒たちの意見を、どの程度聞けるかという部分が、あると思うのですが、県会議員の方たちは、この間も高校生の声を聞く会をもったのですが、高校生の意見は、できれば中学生の意見も、あると思うのですが、子どもたちを主人公にした、そういう意見を十分くみ取っていただいて、これからの改革につなげてほしいと思います。

3点は、単なる数あわせでなくと、ということなのですが、数については75というのが出されていまして、それに向けて進めているわけなのですが、その75という数字そのものですね、これについては県教委が、なかなか譲ってくれないのですけれども、県民の要望からすれば、75で本当にいいのかという、75になれば高校改革になるのかと、いうことに対して、そここのところは、随時考えていただきたいと思っております。

提案の理由、提案については、そこに書いてありますように、旧第7通学区については、県立高校数、一応今2校出ているわけなのですが、この高校は当面、9校ありますが、諏訪地区9校は、当面現状のままにさせていただいて、再編整理については、31年以降生徒減ってきますので、そのときはまた検討するという、そういう方向で、ぜひ進めてほしいという提案であります。

理由の1ですが、これは東高からの資料が出ましたが、2ページ目です。諏訪地区の第7、第8、第9ですね、その地区と関係を見ますと、31年になりますと、どこも下がるわけなのですが、30年までは、諏訪地区についてはむしろ上がっているという、こういう数字ですね。推定募集学級、県教委で出してくる数字についても、このように8と9を比べて諏訪地区非常に高いという、こういう数字が明らかになっているわけです。

先ほども、平成元年からすると、平成12年に比べるとどうなのだという、そういう質問がありましたけれども、平成元年からずっと高校生が減ってきて、平成10年ごろからまた下がってきてということがあったわけなのですが、その間、高校、県教委の方は減らさなかったわけですよ。それは、県教委が減らす必要がないと、長野県教育は今の高校数でいく方がいいのだと、いう判断の基に高校を減らさなかったのではないかと私たちは、思っております。それはどの高校の同窓会の方たちも、そういうふうに使っていると思うのです。

それを、ここへきて10年前とか、そういうところと比較しながら減っているのに、これは減らす必要があるという。これはやはりおかしいのではないかと思います。今までやってこられた部分については、ぜひ尊重していただいて、教育委員長さん企業の方なのですが、企業の論理でなくて、教育の論理として、学校としてはぜひ考えていただきたいという、そういう要望であります。

提案理由の2についてですが、提案理由の2については、5学級募集を減らすのと、6学級、来年は5学級になりますが、南校の2校が対象として上げられたわけなのですが、この再編計画のとおり、もし1校になった場合に、もっと学校の学級増ということになります。11ないし10の学級を5ないし6にするということですから、では残りの生徒は、どこへ移るのかという問題があります。

提案理由2の方の説明になりますが、諏訪地区の場合は、生徒が急減してきた後に、つ

くられた学校があります。この間の23日のときも、東高の方から出されましたが、校舎が新しくなってせっかく建てられたのに、つぶしてしまうのかという意見が、ありました。そういう必要があるのかということですね。

学級数そのものが、例えば二葉も6学級なのです。諏訪実も5学級なのです。そこへ、もし統合して生徒が4学級ですかね、流れてくるとしますと、プレハブ校舎をつくるのかと、いう問題になると思うのですね。もし、せっかくつくった東高を、つぶすということになれば、その校舎そのものが、無駄になるということになりますし、プレハブをつくるという、教育条件の悪い状況になるわけですし、財政的にもうんと無駄が出てくると思います。そういう点から、第7区での学校面というのは、教育条件が低下すると、いうところにつながっていくのではないかと思います。

そこに資料として表が、ありますが、旧第7通学区のところは、学級と6学級のところに集中しております。よその地域では、例えば7学級、8学級のところもあるのですけれども、これを見ていただきますと、赤穂に商業科はありますが、普通科ですよ、普通科がこれだけあるということは、これは地域の要望だと思うのですね。普通科が多い方がいいということで、職業科が少なくなったりと、いうことになるのですけれども、それはそれでまた問題でもあるのですけれども、普通科がこれだけ多いということは、地域の要望。その後旧第7通学区においては、普通科が多いので減らした方がいいと、いう案が出されているのではないかと思います。これもやはり県民の要望からは、離れたものになっていくのではないかと思います。

それから、23日の集会のときでも、県の答弁の中で、統廃合をするという大きな理由のひとつは、一定の学級数が、必要だから統合するのだという、そういう説明がありました。これは吉江課長の説明だったわけですが、諏訪地区のこの状況を見ていただきますと、決して規模が小さいとか、いうところはないのですよね。ですから、改革プランの理由に当たらないと、いうことがいえると思います。むしろ増えてしまうということで、県民のアンケートの結果からも、合わないということができないのではないかと思います。

それから、3つ目ですが、痛み分けによる改革と、いうふうに私たちは感じているわけなのですけれども、これこそ教育とは程遠い理論によるものだ、というふうにとらえております。5.5学級という、結局数から割り出されたこの第3通学区では、3校減らせという、この数字なのですが、これにこだわっていると、上伊那、下伊那で減らしたのだから、諏訪でも減らせとか、いう議論になってしまって、学校どうするだとか、教育どうするだとか、そういうこととも、かけ離れた議論ですよ。後1カ月しかないとか、そういう状況の中では、とにかくまとめなければいけないという、これは推進委員の皆さんも、承知だと思いますけれども、それはよく分かるのですけれども、それで本当に長野県の高校教育はいいのかという、その辺はぜひ考えていただければと思っております。

なぜ75なのか、76、77でもどうしていけないのかという、ところだ、と思うのですね。県民は決してその75に多くの人が、賛同しているわけではないと思いますので、もっと、県会議員の人たちも要請をしていますし、県民の意見というものをぜひ聞いていただいて、先ほどから県教委のほうでは、スケジュールとおりという、冷たい回答をしていますけれども、ぜひ、ぜひそういうことではなくて、もう一度考え直していただければと思います。

この場で、では75でなくてなんてことは、言えないと思いますけれども、少なくとも実施計画を策定するころには、ぜひ考えていただきたいということです。

それから、今日はこの前に要請書というのを、池上委員長さんのほうに提出しましたが、75でなくてということもお願いしました。ぜひ、スケジュール等もあると思いますけれども、スケジュールとおりでなくて、本当に長野県の教育を考えた、そういうプランをつくっていただきたいというふうに思います。以上です。

（池上委員長）

ありがとうございました。それでは、ご質問をお願いしたいと思いますが、いかがですか。

（北原曜委員）

日夜、非常に教育、高教組ということで、子どもたちの教育のためにご尽力されている、敬意を評したいしたいと思います。

ちょっとお伺いしたいのですが、われわれも単に数合わせというわけではなくて、非常に魅力ある高校というものは、どういうものなのかということを、非常に深く今まで議論してまいりました。数の話になってしまいますけれども、県教委の案がいわば6月の案で、実際に実施されますと7、8、9区で、ですね9対6対7校になりましたね、それにやれと、そのほうがいいというご意見なのでしょうか。私はちょっとその辺がよく分からないのですけれども、つまり県教委の案に賛成なのかどうか。いかがでしょうか。

（長野県高等学校教職員組合諏訪支部：中村）

9対6対7でいいと、いっているわけではありません。先ほどからいっているように、この第3通学区で3校を減らすというのが、問題だといっているわけです。本当に推進委員の方々が、3校減らすというのが、魅力ある学校につながるのかどうかと、ということなのですね。もう3校減らすというのが、前提で話し合いをされていますので、そういう数になっていると思うのですけれども。私たちは、地域の要望がなければ、減らさないのがいいというのが、最初からいっていることなのですが。

（熊谷委員）

場違いな質問かもしれませんが。すごく申し訳ありません。高教組は県の教育委員会とは当然、お話し合いは窓口をもっておられて、この問題についても、お話し合いはしてきているわけなのですよね。高教組でという立場では。

（長野県高等学校教職員組合諏訪支部：中村）

はい。高教組として話し合いというか、要望は出しています。何か出された時には、それについてそれはおかしいとか要請は、いろんな場面をお願いしています。

（熊谷委員）

県の教育委員会ではやられているわけですね。

(長野県高等学校教職員組合諏訪支部：中村)

はい。今後からも県の教育委員会でも、そういう要請は出しています。

(池上委員長)

ほかにはいかがでございますか。どうぞ。

(北原曜委員)

その関係なのですが、7区でこの当面、提案ですと現況9校のまま残せということなのですけれども、この第3通学区全体からすれば、7区で9校残せということになりますと、ほかのところにも影響が波及してくる話だと思います。8区、9区のところにも支部がおありだと思うのですが、その支部との整合性といいますが、議論はされていたんでしょうか。

(長野県高等学校教職員組合諏訪支部：中村)

特には8区、9区と話をするとといった部分ですが、高教組の立場とすれば、地域の声を聞いて、地域の方がそういう方向で行こうと、いうことであれば、それを全面的に支援するという、そういう形になっています。

ですから、諏訪支部でも諏訪の支部で、もしどこかの高校が、減ってもいいというふうには地域の方が、納得していくということであれば、もとはそれに反対するものでもございませんし、地域の方がこれだけ反対しているのに、諏訪から減らすというのは、これは僕らとしても、とても支持できるというのにはなりません。

(北原曜委員)

そういうことになると、他の支部もこの統合に反対だと、いろいろ書面もいっぱい来ていますが、そういうことになるのではないかと、思うのですけれども、そうなっては、高校改革もできないということに、なりますけれどもいかがでしょうか。

(長野県高等学校教職員組合諏訪支部：中村)

第3通学区でいうと、ほかの支部でという動きは、それぞれ個別的には出来てきますけれどもね、改革ができないということになると、全県的に見ればお互いの第1、第2、第4のほうでも、それぞれの意見を持ちながら、結局、PTAだとか同窓会の人たちと意見交換をしていると思いますけれども。ですから、PTA、同窓会の人たちと意見の違う案というのは、ここに提案してないと思います。

(池上委員長)

よろしゅうございますか。そのところは。

どうもちょっと納得がいかない感じですね。

(小林委員)

本当に、現場の実際にご苦労されている先生ですね。そういうことでちょっとお聞きしたいのですが、今回できた案はたまたま統廃合ということで出て来た、そういうことでのご意見というのは、意見としては私も理解ができますが、今回われわれが本当に考えていることは、あくまでも改革というのは、統廃合もあるし、今まで検討されてきた多部制・単位制とか、総合学科高校、それからジョイント化とか、いろいろあるわけですね。そういうことについては、どういうお考えなのか、検討する必要一切ないということなのかお願いします。

(長野県高等学校教職員組合諏訪支部：中村)

いえ。検討する必要があると思います。総合学科についても、いろいろ検討して、結果必ずしもうまくいっているのかどうかというのは、前の推進委員会の中でも、非常に先生のほうから資料が、出されていると思いますが、全国的に見て、果たしてうまくいっているのか、多部制についても果たしてどうなのかという、そういう検討はしています。

本当にそれがいいということであれば、大いにやりましょうということを、提案していけると思うのですが、いろいろな問題点があるので、それについて、ではみんなで幾つつくりましょうとか、そういうふうになっていないと思うのですね。

(池上委員長)

よろしゅうございますか。はい。最後にですね、ちょっと委員長、私からお願いいたします。先ほどの熊谷委員のご意見に、同じところがあるのでございますが、少なくとも、最も多い時期に比べまして、大幅に50数パーセントという率になっていますよね。これはまあ事実でございませうね。

それに至るまでに、教育のプロとして教育委員会等で、このことどうしようかという議論を、ずっと継続されたのではないかと、私は確信をしているのですが、まずその点はいかがでございましたでしょうかね。

皆さんのほうからは、「これからゆっくり議論して」と、いう話が強いように、認識しておりますけれども。そのあたりはちょっと認識が、かなり違うというふうに思っておりますが。いかがでございましょうか。

(長野県高等学校教職員組合諏訪支部：中村)

今までについては、学校を減らす必要がないと、いうことについたと思うのです。地域によっては、ちょっと2クラスとか規模が小さくなってきたので、今学校全体としての活力とかそういう点では、考えたほうがいいかなと、いうことはあったと思うのですが、その地域の人たちですとか、それも、PTAの方ですとか、そういうところの意見の中で、ではうちは閉校で結構ですとか、そういうのはなかったというのですね。

それぞれの学校規模の中で、どういう学校がいいかというのを規模に応じ、学校に応じて魅力づくりを、取り組んできたのではないかと考えています。



(池上委員長)

では、この先生方の集団としては、そういう議論を余りなさってこなかったということでございますね。

(長野県高等学校教職員組合諏訪支部：中村)

私は、本部の役員ではないのでよく分かりませんが、そういう議論は十分されていると思います。

(池上委員長)

では、もう少しですね、違うご意見があってもいいのではないかと思います。前から皆さんのご意見を拝聴しているというのは、大変重要でございますが、「私の意見はこうだ」とか、「財政を考えてどうだ」とかですね、いう側面から議論があってもいいのだと、いうことを私は考えているのですが、いかがでございましょうか。

(長野県高等学校教職員組合諏訪支部：中村)

はい。財政については、確かに人件費がほとんどですので、大変だということは分かっていますが、教育というのはやはり人間が、行うものですので、財政的に確かに厳しいところがあっても、企業とは違いますのでね、企業の論理で教育を考えるということとは、別の形で考えるとしたいというふうに、進んできていると思うのですが。

(池上委員長)

ある意味では平行線になりますから、これ以上議論いたしません、私は少し違う意見を持っておりますので、先生のご意見を参考にしながら、また委員会の審議に生かしていきたいと思います。最後にほかのみなさんいかがでございましょうか。ご意見は、よろしゅうございますか。それでは、貴重なご意見ありがとうございました。ありがとうございました。

それでは、次に入っていきたいと思います。これで地区のみなさんのご意見を拝聴するところをですね、今日のところは終了いたしたいと思います。大変ご発表いただきましたみなさんに、敬意と感謝を申し上げます。ありがとうございました。

それでは、各地域につきまして、これからいよいよほとんどわれわれは、結論を得ておりませんから、各地域のご提案をいただいた内容についてですね、これから検討していきたいと思います。

それで、ちょっと委員の都合で、中座をされる方がおりますので、上伊那からやらせていただきたいと。方法としては、まず、再配置ですから、地区別にやらせていただくということにしたいと思いますが、そんなふうにご協力をいただきたいと思います。

それで、過日上伊那のほうからは、箕輪工業高校の全日制の廃止と、それから多部制・単位制の導入ということが、提案をされております。

それからもうひとつ、上農高校の定時制ということで、これを箕輪に統合するということも、提案されておりますが、これでよろしゅうございましょうか。今度、委員会の意見としてまとめていきたいと思いますが。

(藤本委員)

よろしいですか。

3点、お願いしたいのですが。小林委員さん、具体的に、ちょっと事情もあったということですが、どのような地域の方々から、どういう機会をもつけられて、地域のご意見を伺ったのか。その中には、反対、賛成、そのほかいろいろな意見があったと思いますが、まずは、第1点はその点ですね。どういう方々から意見を伺い、その中にはどういう意見であったのでしょうか、というのがまず1点です。

もう1点は、総合学科については検討したけれども、表現は私もちょっと忘れましたが、上伊那にとっては希望がなかったといわれましたが、その点がもう1点です。

最後は、要望ですが、小坂委員さんも、お名前が載っておりますが、ここに定時制振興会のメンバーのみなさんから要望書がきております。その要望書の中で、私も再三申しておりましたが、非常に上伊那の、夜間定時制の生徒のみなさんに配慮されて、心遣いされている提案であって、非常に私も感心して読ませていただいたのです。

市長さん初め、すべての定時制振興会の皆さま方の、要望書を読んでやはり一番ひかかる1点は何かといえば、私も2年前、定時制にずっといたのですが、定時制の職員室というのは、本当にもう、生徒の食事の場であり、また、教室に行かない生徒はそこが学習する場であったり、それから、登校してから下校するまで世間話をする、そんな場であるわけです。そのような定時制の本当に少人数でアットホームな、少人数で先生と生徒の本当の心の触れ合いの場である定時制が、この多部制・単位制で本当に大丈夫かな、対応できるのか、ただ1点そこだけです。その点を。

非常に上伊那の委員さんが、丁寧にまとめられていて、私もよく配慮されているなあと思うのですが、そういう点で上農の定時制についてはですね、私は少なくとも、上伊那の多部制・単位制が受け皿として、それなりにきちんと配置され、確証が持てるまでは、ここ数年になるかどうか、19年度実施ということですが、様子を見るまでは上農の定時制を残しておきたいと思います。

もちろん、最初からそういう自信があるという、ご提案だと思うのですが、そういう実態、そういう生徒ですので。さらに私のところに、養護学校とその生徒、困難を要する生徒の保護者のみなさんからも、いろいろな要望をいただいております、やはり定時制が受け皿になっている、不登校生だけではないという、そういう定時制の現状を考えたときに、すぐ19年度から上農をつぶしてしまうということには、私はもちろんずっと残してもらいたいのですが、そうはいっても、それなりの受け皿として、きちんとした学校になるまで、そういう確証と、それなりの実績ができるまで、少なくとも4年、5年は残して、それからでもいいのではないかなと、そんな気がします。3点でしたか、4点でしたかよろしくお願いします。

(池上委員長)

ありがとうございました。では、小坂委員お願いします。

(小坂委員)

すみません。ちょっと、4時から会議があるものですから、私のほうから定時制の問題と全体的なことを述べさせていただきます。

上伊那、上農高校の定時制は、上農高校が南箕輪に移転した際に、今まで一緒にあったのを独立校とした経過がございます。そうした中で、この定時制をどこかへ移管すべきだということで、管内の普通高校へ依頼をした経過もございます。具体的には伊那北高校へお願いをしたという経過がございます。

しかしそれは、伊那北高校のほうで受けられない。こういうことで、単独として残った。こういう経過がひとつ。それから、もうひとつですね、それは最近ですけれども、定時制の統合というものが、ささやかれました、上伊那をひとつにしようということで、3つの定時制をひとつにしたらどうかと。こういう議論がございました。

しかし、現状を見ますと、駒ヶ根が一番ニーズ的には多いのですね、従ってそれはまずいのではないかと、こういうことでそれも県教委の方でも認識がなかったということもありまして、ご破算になったわけです。

今度は、上農高校の定時制を廃止するについて、いろいろ意見を語り、在校生の方、それから同窓会あるいはみなさんから、ご意見をいただきました。そうした中で私は、アットホーム的なことを、今はもう多部制・単位制高校で残すと、いう条件であればいいのではないかとということで、お話をした経過があります。

今の定時制の生徒というのは、藤本先生も教職の場にあったわけですから、実際はですね不登校にとか、いわゆる団体の中に、溶け込まれないような生徒が、多数在籍していることは、やはり事実ですね。それは藤本先生も、十分ご承知だったと思います。

ですから、そういうアットホーム的なことを、先生といつでも話し合いができるような場をつくれば、救えるのではないかと。距離的にも電車で20分ぐらいということで、十分対応できるのではないかと。こういうことで私としてはやむを得ないのかな。全体的にやむを得ないのかな。こういうことでございます。

それから、もうひとつ全体的な問題で、ちょっと私のほうから申し上げたいと思います。県教委にお聞きしますが、各地域ですね、高校生の急増ということで、確か下諏訪向陽は新設校ということで、出ていたと思います。出来上がったのは幾日でしょうか。

昭和55年ですか、高校改革プランの中で、平成2年が一番の高校生の人数が多いということで、既にそのときに下諏訪向陽もあり諏訪地区が9校、それから上伊那では、駒ヶ根工業を赤穂から分離、それから、松川高校というのがありましたが、それも新設とこういうようなことであったわけでございまして、先ほども資料が出されまして、いわゆる短期間の生徒数だけで判断するのは、いかがなものかと。平成2年からだというと、約30年の推移を見ておるわけですね。

そうした中で、例えば31年には諏訪と上伊那で100人しか変わらない。しかも、諏訪は9校、上伊那と下伊那は8校ある。こういうことの中で、1校はやはり痛み分けをすべきではないかということで、諏訪の委員さん集まっていたいてですね、私どもは非常に、諏訪は難しいかなと思っておりましたけれども、4人の委員さんお集まりをいただいて、あの案が出来てきたわけでございます。それで3つそろったと、ということで安堵(あんど)をいたしておったわけでございます。

やはり、ひとつは長いスタンスで考えなければいけないということ、それからもうひとつ、今年、国勢調査が4年に1度、ボツボツ速報値がでると思いますが、こういうのもやはり参考にしていかなければいけないだろう。人口の増減というのは、やはり将来の学校にも、当然影響してくるのではないかと、いうふうに思っております。

それからもうひとつ上伊那地域からですね、諏訪地域への流入が非常に多いと、こういふことでございますけれども、ほかからの上伊那への流入が少ないわけですが、来年の2月には権兵衛トンネルが、開通をいたします。そうしますと、通勤、通学の件、30分で結ばれるということでございます。場合によってはですね、木曽との交流が始まるのではないかと、いうようなこともあるわけでございます。

そうした意味で、やはり、数合わせという、さっきお言葉がありましたけれども、数合わせでなくて、将来を考えた場合に、やはり各群1校ずつやるべきではないか。

しかも、上伊那の委員さんはですね、将来のことについても、総合学科がどこも手を挙げないということになれば、ひとつ考えてはどうかというような議論をやっておるわけでございますので、そんな点で、ですね、やはり原点に戻って委員会で決めたことは、諏訪の場合どうするだというお話がございますので、十分意見を集約をして、出していただければ大変ありがたいなと思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。それでは、小林委員ひとつ。ご回答3つございましたので、恐れ入りますが、そこだけひとつ。

(小林委員)

時間を見ながら、うんと短時間で、答えさせていただきますが、申し訳ございません。ひとつはですね、定時制の問題については、もう小坂市長さんおっしゃったとおりで、問題はその過渡期をどうするかということですが、過渡期についてですね、それについてはもう少し詰めなければいけないことが、あるかなと思いますが、考えていることは小坂市長さんの考えているとおりでございます。

あそこの案を見ていただければ分かるように、軽度発達障害の生徒さんのことも配慮されています。ただ、今養護学校の高等部は、軽度発達障害は全く受け入れておりません。したがって、それはもう別の次元で、考えてはかなくては行けない。

養護学校の高等部へ行けない生徒について。それは私もうんと考えるべきだと前から思っていました。それがひとつです。

それから2つ目。検討を進めた名前までいわなければいけませんか。どういう人、どういったかですね。そういうことですね。はっきりいいます。現場の関係者の代表のかたといっていいか、それから、同窓会の関係者とかかなり話をしました。関係の人たちも、相当研究されているということがわかりました。関係者の意見を取り入れました。だから私が、提案したのは、むしろ夜間部のことですね。夜間部のことはどちらかというと私のたたき台といってもいい。現場の意見についてはなるほどなあと、非常に納得しました。それがひとつです。

それから、駒工、赤穂のことですが、はっきりいってかなりこれも現場の方々、ただし、

これは直接の学校の方ではなくて、PTAと同窓会の方ですが、相当突っ込んでやりました。私自身も、実際にたたき台をつくってみたのです。駒工とそれから赤穂高校の、統合の案をつくってみたのです。つくってみたところ、非常に無理があるということが分かりました。

それからもうひとつ。もう私自身がこれはどうも出してもね、なかなか理解してもらえない。一応出しましたが、当然否案されましたが、赤穂高校単独の総合学科についても提案をしたのですが、あそこは、伊南の地域という意識が非常に強く、今の諏訪みたいな感じですね、伊南の地域からそうすると普通科が何もなくなってしまうと、このことになり抵抗がありました。今後上伊那でも、箕工の再編だけではなくて、さらに検討していかなくはないが、取りあえずは、今回は、答申は箕工だけですけれども、今後はさらに継続して検討していかなければいけないと、そういう考えで皆さん、まとまっております。

（藤本委員）

ここで、だんだん地区ごとに、固めていきたいということですが、やはり上農の定時制だけについては、ここでは結論づけないでもう少し、私は意見を聞いてみたいと思いますので、徐々に上伊那から決めていきたいという委員長さんの話でしたが、そんなことをお願いできないでしょうか。

（池上委員長）

わかりました。それは先ほど先生の発言あるように、時間軸的に考えるということで、よろしゅうございますね。はい。

（藤本委員）

これから皆さんに意見を聞いてみたいと思いますので、それにもよると思いますが、たとえ統合ということになったとしても、やはりある程度、受け皿としての条件が確認されるまでは、少なくとも数年だと思いますが、残すことが考えられるのではないかと私は思いますので、すぐこの場で統合、19年度から統合というのは疑問です。

（池上委員長）

わかりました。では少し時間をおいて次の機会あたりに、結論をつけていくということにしていきましょう。ただ、統合という事については濃いですけど、よろしいですね。

（藤本委員）

将来的に、いい学校になるのであれば、私はやむを得ないということですが、そこに、いま一步、わからない部分もあるものですから。

(池上委員長)

では、しっかり研究していただいてこの次の機会には、ご発言ください。上伊那について何かご発言がございましたら、お願いしたいと思いますが、今残っているのは、私と北原委員だけでございますが、ということでよろしゅうございますか。

それでは下伊那地区のところに、入っていきたいと思いますが、どちらかからか、ご発言をいただきたいと思いますが。

(熊谷委員)

今日は岡庭さんが来る予定だと思っていましたので、岡庭さんがやってくれると思っておりましたので、私しゃべる予定してこなかったのですが。

一応、下伊那というのは前回お話ししましたが、南信州広域連合が、高等学校の未来検討委員会というのを、委員 37 名で設置いたしまして、高等学校の配置の在り方等について諮問をいただいて、10 月 13 日から 6 回にわたって検討させていただきまして、一応その答申を、12 月 20 日に広域連合長に、検討委員会長が文書で答申させていただきました。内容については次回に、検討案をお示ししたいと思いますが、他の人と打合せをしてないものですから、出していいのか確認していないので、多分次回には、内容については概要をお話出来ると思います。

一応その答申につきましては、候補案の代案ということで、長姫高校と飯田工業高校と統合して合わせて同校の定時制を統合する案を、代案とさせていただきます。これにつきましては、6 学科を存続させるために、物作り中心とした専門高校として南信地区に拠点校となるよう充実を計る事が 1 点。

次に統合により、新学級にない設備等の増が平常より低くならないこと、最後に今後の進み方が両校に同じになるように、広域連合として責任を持って進めること。こんなようなことで、代案ということで答申といたしました。

今後の課題として基本教育の在り方、地域高の在り方、多部制・単位制高校の在り方、総合学科の在り方についても、検討がかなり必要であることも、今後の課題として提起させていただきます。

特に多部制・単位制につきましても、地域の要望としては箕輪だということになれば、通学圏域として苦しい箇所もあるので、分室を設置してまいりたいと、PTA関係者の話からでは、総合学科についても、検討したいという要望がありまして、それについては、今後の課題ということで、よろしく願いしたいというふうに思います。以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。今のところの総合学科については、そうしますと今後の課題というのは、今回のこの委員会ではない、次のあるべき、あるであろう機会に、というお話ですか。

(熊谷委員)

南信州未来検討委員会としては、「課題とする」ということにしか出来ませんでした。この推進委員会との関連は、別ということです。

(池上委員長)

この推進委員会では、ご提案がないということですね。

(熊谷委員)

今の段階では。

(池上委員長)

「ない」と、ということですね。ただ当委員会としては、これはとにかくそういう形で、どこかに設置することが、いろいろ議論はあるでしょうけれど、各通学区に対して1校以上という形で、最終答申が行われておりますので、それを踏まえてさすればという意見が、出てくると思いますけれど、それをご承知おきいただきたいと思います。よろしゅうございますね。

ほかの委員の皆さんで、飯田、下伊那について、ご意見がありましたらお願いしたいと思いますが。どうぞ。

(北原曜委員)

大変ご尽力されていると、飯田工業と長姫ということとなりますと、かなり大規模な事になってしまうと思うので、その辺は校舎の問題だとか、それから工業科と商業科とありますね、その辺の事というか将来展望といいますが、それがどういうふうになっているのか。

(熊谷委員)

それにつきましては、先ほどいいましたように10月13日から12月15日のちょうど2カ月の議論でございますので、そういった具体例までは、踏み込んだ議論はされていないので実態です。両高校を合わせますと8学級、現在なるわけですが、当然8学級規模も、どちらが、各校舎に移るといことは難しいと、いう議論もされましたし、学科につきましても、現在の2校合わせまして8学科あるのですが、うまく8学級を維持する事みたいなことも、若干はされましたけれど、これについては、県教委が当然、大事な問題なので、検討するはずですから、いろんな検討をされるであろうということで、未来検討委員会そのものは、いいか悪いかは別としても、推進委員会に取り敢えず地元の意見を、反映されなければならないと、いう信念を持ってやっているものですから、この推進委員会もにらみながら結論を、出してきたという経緯がございますので、そういう意味で、議論を十分されたかということは、両校の校舎はどちらを使うのかとか、校名はどうするのかと、議論はそこまでは踏み込んだ意見は、出来ていませんので。先ほどいいましたように、3つ言いましたけれども、今後の進み方は両校に任せることなく、広域連合として責任を持って進めるということで、地域としてこれだけの結論をもってきたので、地域の広域連合で責任を持って進めてくださいと、ということでこの件に対しての意見です。こういった広域連合を含めた、県教委を含めたこれが課題なのかなと思います。

(池上委員長)

今の点はですね、魅力論・魅力つくりの世界で、議論をされてしかるべきと、いうところからでございますので、そこでもやっていただいて、委員会としてはかくあるべしという方向で、いきたいと思いますが、いかかでございますかね。

(熊谷委員)

一応3人か4人で工業高校、長姫高校の関係者と意見交換をするというっておりますので、若干の意見は出せるかもしれませんが、当然1月にまとめということになれば、中へどこまで踏み込めるかと、いうのは全然予定をしておりますけれども、一応未来検討委員会としては、そこに落とし込めるかなと考えております。ご了承願いたいと思います。

(池上委員長)

わかりました。ありがとうございました。重ねてほかの委員の皆さん、いかがでございますかね。

(藤本委員)

一番、地域の皆さんの意見を聞きながら時間をかけて、意見を汲みながら検討されてきた9通ですので、私たちがどこを、どうこういうわけではなくて、岡庭委員さんの本当に時間不足だったという点が気になりました。2点だけお願いしたいのですが、北原委員さんの、前回の商業科の位置付けがよく分からなかったことが、一点と。

もう1点は、前は箕工に多部制・単位制ということでしたが、どうしても飯田、下伊那地区には、教育7団体、地域等の要望があったものですから、前回、私もはっきりとはわかりませんが、昼間部の多部制のような、昼間部だけの定時制を統合した定時制に、という発言が前回もあったように思うのですが、その2点だけ。商業とそれから昼間部のたぶん定時制といわれていたように記憶しているのですが、申し訳ないですが、その2点をよろしくお願いいたします。

(熊谷委員)

商業科につきましては、先ほども言いましたように、両校にある6学科をもって来て、統合したいという位置付けでございまして。商業科がいうなら、クラスが2クラスあるのですが、その2クラスが地域に必要であるのかという、また逆に工業でも機械科が2クラスあるのですが、そちらの方で必要かと、ということで、すぐに聞いてみますけれども、未来検討委員会としては、再編までは踏み込んだ議論をしていません。従って答申としては、6学科を持った専門高校をつくと、いう答申になっています。

議論の中では、学科再編も必要ではないか、という意見もあったことは、いっておきます。時間の関係で、そこで終わっています。多部制・単位制については、先ほど言いましたように、多部制・単位制をぜひ分室という形で、設置してほしいとの意見も、出ておりますので、検討課題ということで、整理させていただいています。



（藤本委員）

もう1点、教えていただきたいのですが。総合学科については今後の課題、あるいは今後の課題になっているものが幾つかありますが、それについては次回か、その次の回に提案されるのでしょうか。スケジュール的なことをちょっと教えてください。

（熊谷委員）

そうですね、未来検討委員会そのものは、委員会そのものは、20日で一応閉じておりますので。次の議論をするとするば、広域連合の場になるのか、また別の組織を立ち上げるのか、まだ決まっております。

一応、未来検討委員会そのものが、広域連合から諮問を受けて、広域連合の答申として終わりにしましたので、総合学科なり多部制・単位制の課題を、どうするかということを議論するのは、どこで議論をするのだと、いうところまでまだ深まっていないというので、岡庭委員が来れば、その辺も中の空気も、分かるでしょうけれども、分かりませんので、次回に回させていただきます。

（池上委員長）

よろしいですか。ありがとうございました。

いずれにしても、まさに地域の総意をもってという世界がひとつ。後は正式文書で、ちょうだいするというので、今日は結論をこうしていきたいと、これは今の話ですと、数からするとまだ検討課題の方が多くなるかもしれないのですが、とにかく骨子としては、飯田長姫高校と飯田工業の統合ということですね。それから定時制も同様にすると。その内容についてはこれから検討していただくと、われわれとしても魅力づくりの世界で、議論すること同時に県教育委員会に、それを預ける部分もあり得ると、こういうことですね。

ありがとうございました。それでは諏訪の地域の問題でございますが、これは笠原副委員長いかかですかね。

（笠原副委員長）

先月の23日に、諏訪の委員の意見をまとめてみました。その結果、今日いろいろな団体から、要望・要請・提案等があったように、われわれも今までも、地域の十分の意見を聞いていない中で、ああいう形にせざるを得ないという中で、今現在、私としてもコメントがまだできない状況であります。

（池上委員長）

経過は先ほど事務局からも報告がございましたし、先ほど皆さんの意見発表の時点で、うかがい知るところが多いわけでございますが、いずれにいたしましても、諏訪地域で1校ということについては、結論がつけていますので、それ以外の事項ですね、どういう学校をと、いうところの魅力論を含めてですね、これから議論をしなくてはならないだろうという認識であります。

今日強引に結論をとというのは、どうもそれぞれの皆さんに、失礼な話でございますので、これは今日のご意見も、その他の委員の皆さんから拝聴して、それで置いて次の機会にし

ていきたいと思います。よろしくお願ひしたいと思います。

まず最初に、諏訪以外の地域の委員の皆さんに、ご意見がございましたらぜひ、アイデア、アドバイスを含めて、お願ひいたします。

（北原曜委員）

今日は旧7区のご意見をいろいろ拝聴いたしまして、非常に感激といえますか、随分苦労しているなと思いました。それで統合というと、すごくマイナスのイメージが強いのですが、もう少し前向きに考えてみたらどうかということです。すなわち、今3通の中で総合学科校というのが、宙ぶらりんになっていますよね。

今まで、今日の発表していただいた方々の意見をお伺ひいたしますと、すごく、前から岡谷南、東というのは、いい学校であるには間違いのないですね。英語科もありますし、スポーツ体育関係も非常に素晴らしい業績を、残しているということですね。ここに総合学科というのは、どうなのだろうかと、こういう気がしているのです。

というのは、非常に進学にシフトした総合学科、基もこの7区というのは、教育に対する関心が非常に強いところで、いつも過去に優秀な方々も排出しています。そういうことから諏訪清陵、二葉を越すような、進学にシフトした総合学科校。ここは、別にいわゆる座学とかいうのではなく、英語だとか数理・数学・物理それからスポーツ体育そういうような、あるいは音楽もいいかと思うのですが、そういうような個性をものすごく伸ばすような、学校にしてはどうかと、いうことをちょっと感じております。いかがでしょうか。

（池上委員長）

川島委員、いかがですかね。ご苦労なさった下伊那を、まとめてみえたということも、ございますし。

（川島委員）

はい、先ほど高教組の支部長さんが、発表された中で、5クラスの学校と6クラスの学校の統合と、いうことになると、非常に他への振り分けが難しいと、いったご意見がありまして、それでいただいた資料の18ページに、諏訪二葉あるいは諏訪実業等では、教室数のキャパがないと、いう指摘があったのですが、この点実際どうなのかという点を、県教委にお伺ひしたいと思うのですが、二葉、諏訪実あたりでクラスが増やせるのかどうか。

（柳澤教育主幹）

はい。旧第7通学区の、現在の学級数の規模からいいますと、キャパシティ的には57学級ぐらいの収容定員が、可能になっています。従いまして、例えば仮に6マイナスになりますと51学級ぐらいと、単純に計算できます。

(川島委員)

非常に県教委の案としましては、下伊那に総合学科ということで、ご提案いただいていたんですが、やはり第9区としましては、専門学科への要望が非常に強いということで、専門高校を総合学科に転換すると、ということについてやはり多くの理解を得るのが、難しいということとはございます。第3通学区の中で、どこか1校を専門学科にということになれば、一応第3通学区としてはそのような状況なので、今北原委員さんがおっしゃいましたように、ほかの地区で可能性が、あれば検討させてもらいたい、ということを考えています。

(池上委員長)

例えば、諏訪の地区に総合学科と、いうことでございますね。

(川島委員)

そういう意見が、あれば前向きに検討したいと思います

(池上委員長)

笠原委員この点はどうですかね。

(笠原副委員長)

実は、諏訪の委員のブロック会議の中でも、総合学科という話も経過の中には出ていたわけですが。あの時点では総合学科、多部制のことはのぞいて、要するに全日制、普通科の1校減という話し合いが中心でしたので、話し合いの中では、多部制・単位制の話も、あるいは総合学科の話も、具体的には話し合いの中には出ておりました。ただ諏訪の場合には、塩尻に近いということで、具体的に総合学科をとるところまでは、話し合いに至っていません。話の経過の中ではそういう話もあったということです。

(池上委員長)

ほかの諏訪地区の委員のご意見ございましたら、どうぞ。

(小口委員)

今、総合学科の話が出ていますが、私個人としてはやはり諏訪地域にも総合学科は、ぜひほしいなと、いうふうに思っていてまして、先ほど北原先生の方から、岡南と岡谷東のこの部分を総合学科にという話が、ありましたが、これもひとつでしょうし、それからほかの地域の部分でも、総合学科というのは、私どもが勉強する今までの過程の中では、非常に評価が高いということなので、ぜひそういうことの中で、個性を伸ばせるようなそんな教育につながればいいなと思っています。

ただ総合学科の、今までの意味合いからすると、やはり地域の要望が、例えば塩尻志学館でもあって、総合学科ができたように、地域の盛り上がりがどうしても必要だと思うのです。その中で、今のその現状の諏訪地域の様子でいきますと、白紙撤回ということが先行してしまっていて、なかなかあるいは高校が、つぶされるんではないかと、こういう意味合

いですね。なかなかどういう方向へしようと、いうことにいていないと思うのですね。そこをうまく何とかして、どういう学校にそれぞれを、岡谷南、岡谷東だけの問題ではなくて、持っていくかということにしていけないと、どうしてもそのままとおりづらいと、というような気がしているのですよね。

私個人としてはやはり、勉強する過程では、非常にいいなと、どこか決まればいいなあと思っているのです。そこが一番ネックじゃないかという気がしています。

(池上委員長)

なるほど、ほかの委員はいかがですか。

熊谷委員、諏訪地区に対する、アドバイスはございませんか。

(熊谷委員)

アドバイスはひとつもございません。ただ先ほどずっとご意見を聞いていまして、私ども地域でも、ああいった声をお聞きしながら、積み上げてきたという実情があって、私ども地域も、何となく出て来たわけではなくて、先ほど聞いたようなご意見もありながら、いろんな意味で、いろんな思いを積み上げてここまできた事、それについては逆に諏訪の皆さんにも、ご理解いただきたいと思いながら、聞かせていただきました。ですから諏訪の皆さんの意見に対して「どうこう」ということはできないのではないかと、それはどの地域も、同じではないかなと思って聞かせていただきました。

それから総合学科でございますが、私ども実は3人の委員の意見が非常にぜひ下伊那にも否定的に見ているところがあるんですが、地域の中でどうなのかと、いうことをもう少し見ていたいなと、いう気がするものですから、今日のところは保留とさせていただきたいと思っております。

(池上委員長)

よりよい学校ということで、先ほど北原委員の方からご発言ございましたけれど、ネガティブにものを考えるのではなくて、もっと積極的にいい学校を、どうするかと、今まで出てきた結論の中で、どういう学校につくり上げていくのがいいのだろうと、いう議論のまだ途上だというふうに思っています。

従いまして、教育委員会のおっしゃる時間軸に、ピッタリ当てはまるというのは、ある意味では無理なのかもしれない。従いまして、至急にまた検討させていただいて、それこそ地域の皆さんとも、議論させていただいて、最終的に委員会でまとめるという方向で、今後やらせていただこうと、考えておりますが、いかがでしょうか。

これより方法がないわけのような気がしますので、よろしいですか。それでは諏訪についてはそういうことで、今日のところでは結論をつけずに、よりよい学校をどうするかという方向で、今後検討しよう、ということにいたしたいと思いますので、さようご承知おきをいただきたいと、こういうふうに思います。よろしくお願いいたします。

それでは、いったん旧3地区のご意見を拝聴して、方向としては上伊那、下伊那は方向としてまとまってきたので、このようにしたいと思います。諏訪はそうのようにしたいと思います。よろしくどうぞお願いしたいと思います。

それでは時間も、後 10 分位になって参りましたので、次回の日程計画について事務局ひとつご発言いただきたいと思います。

（野村主幹教育支援主事）

次回来年の 1 月になるわけですが、3 回ほど、いつもより 1 回増やすような感じでやっていただけた方が、いいのかなと考えているのですが、その点はいかがでしょう。

（池上委員長）

委員長は結構ですが、その他の皆さんはいかがでしょう、3 回くらいやらせていただいて、結論を付けていきたいと。残っておりますのは、魅力づくりである意味では、逆に最大になりますので、そこに集中したいと思います。

（野村主幹教育支援主事）

委員長さんともその点、詰めさせていただきながらでございますが、次回の日程だけ申し上げますけれど、来年の 1 月 12 日（木曜日）になりますけれども、午前を考えております。まだ場所等ははっきり決まっておりますが、委員長さんともご相談の上、改めてご案内を、差し上げたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

（池上委員長）

はい。その後はいいですか。よろしいですか。12 日はいかがですか。特に問題はございませんか。まだわかりませんか。それでは調整をさせていただいて、今日のところは 12 日ということ、次回にさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

（藤本委員）

委員長。

（池上委員長）

はい、どうぞ。

（藤本委員）

時間が残り、事務局にも許可を得たので、私は、他県の高校改革プランはどういうものかなと、インターネットで調べているのですが、時間が若干、10 分ほどありますので、他県の特に、青森県の高校改革プランに興味があったので、もし委員長さんよろしければプリントを配ってもいいでしょうか。

（池上委員長）

どうぞ。

( 藤本委員 )

時間があるので 1 分、2 分だけ。青森県の高校改革プランを青森県教育委員会のホームページからダウンロードしまして、ずっと読ませていただいたのですが、長いプリントなので、要点的なところだけコピーしたものです。まず青森県の 1 番ですが、長野県のように 19 年度一斉に「ドン」ということで、平成 31 年までということではなくて、他県の多くが、前に高校教育課長さんが言われておりましたが、第一次、第二次と段階を経て、高校改革を進めていくというのが、他県ですね。

青森県の場合は 12 年度から 16 年度、第二次が 17 年度から 20 年度と、しかも第二次は第一次の実施計画の成果を踏まえながら、しかも地域の実情を検証しながら、第二次を立案してやっている。これが他県の状況です。

もうひとつ、私も時間があるときは時々ホームページをみていたのですが、2 番目は、生徒の減少に対しては、もちろん統廃合も学級減も青森県でもやっているのですが、小規模校すなわち 1 学年が 2 ないし 3 学級の規模については、35 人学級を進めているということです。

それから 3 番目ですが、町村部の 1 学年が 3 学級以下の学校については、全学年が 1 学級規模になった時点で、校舎制にする。校舎制というのは分校と同じですが、青森県の知事さん、教育委員長さんは、分校という言葉は、非常に差別的で校舎制がいいと、たとえ 1 学級になっても学校を残して、そして本校から教員を派遣して、スポーツだとか文化系のいろんな事を、合同にしてやっている、そして教育活動も充実しているのだと。だからたとえ各学年 1、1、1、1 学級になったとしても、校舎制にして残すべきところは、最後まで残すのだと。もちろん青森県は統廃合をやっておりますが。他県の高校改革を参考までにコピーして、その代表的なページを出しましたが、やはり県教委はこの辺の 35 人学級など、こういうところで、決断をぜひお願いしたいと思って、他県の高校改革をプリントしてもらってきました。すいません、時間をいただきました。

( 池上委員長 )

ありがとうございました。ほかにご意見ございませんか、よろしいですか。事務局いいですか。それでは、熱心にご討議いただきましてありがとうございました。

これで今年の委員会の討議を、終了したいと思います。本当に今年はお世話になりました。来年もひとつよろしく願いいたします。ありがとうございました。